

〔研究ノート〕

アイヌ民族と2人の英国人（5）

小柳伸顕

マンロー熊送り（イオマンテ）再論

イオマンテを映像で残したのは、イギリス人正確にはスコットランド人で医師、人類学者の N. G. マンローが最初の人です。この点は先に（アイヌ民族と2人の英国人（4）『キリスト教論集』49 2014年）紹介しました。しかしその紹介は、マンローの1次資料、つまり映像自身によるものではなく2次資料とも言うべき、他の研究者たちの研究に依拠したものです。今回は、マンローのイオマンテの映像に直接あたり、マンローのイオマンテ論について述べてみます。

資料は以下の3点です。

- 1 映像記録 The KAMUI IOMANDE（英文字幕入り）53分₁
- 2 映像記録 The Ainu Bear Ceremony（音声入り）27分₂
- 3 講演記録 THE AINU BEAR FESTIVAL₃

映像については先にも紹介しましたように「国立民俗歴史博物館」₄による詳細な研究がありますが、マンローが残した5巻の生フィルムと映像「The KAMUI IOMANDE」と「The Ainu Bear Ceremony」との関係、つまり5巻の生フィルムがどのような過程をへて編集されたかは不明です。筆者は、直接残された5巻の生フィルムを視聴していないからです。この点は、専門の研究者による解明に期待するところです。

キーワード：マンロー、イオマンテ、カムイ、ラマツ、イナウ

1 字幕入り映像 The KAMUI IOMANDE (以下「イオマンテ」と省略)

字幕入り映像「イオマンテ」は、約53分の16ミリ映画です。映像は、北海道二風谷沙流川（現平取町二風谷）で、1930年12月25日～27日まで、マンロー監督、大沢商会の技術、そして二風谷のアイヌの人々の協力のもと撮影されたものです。当時二風谷には電気が来ていませんでしたので音声を入れることは出来ませんでした。従って、何度も繰り返されるイオマンテの核心とも言うべきカムイノミ（kamuinomi 祈り）は録音されていません。やはり記録としては残念と言うしかありません。

ここでは字幕入り（英語）「イオマンテ」の構成に触れながら、マンローの熊送り観というか熊送り理解に触れてみます。

映像の構成は、まず英語で映像の内容が提示され⁵、それに続いて映像⁶が写し出されます。字幕は、映像理解のためのコメントですが、それは同時にイオマンテに対するマンロー自身のイオマンテ論と言えます。

構成については筆者自身の分類方法に従いました。その分類方法は、字幕のカット（1カットから数カット）に番号を付し、その内容を日本語で短く表示し、字幕（英語またはアイヌ語）の最初のフレーズを付しました。

この紹介方法がマンロー自身や編集にあたった人たちの方法でないことは言うまでもありません。

2 「イオマンテ」の構成

53分に及ぶ映像と字幕は次のように構成されています。映像そのものは27分ですが、この映像を観る英国人を前提に字幕が入れられています。

筆者は、53分を計83カットに分類しました。それぞれのカットは短いものもまた長いものもあります。長いものは、マンローがその解説に力を入れたものと受け取りました⁷。

構成は大きく分けて二部から成ります。第一部は、アイヌの民族つまりイ

オマンテをより深く理解できる準備編と言えます。第二部は、3日間に渡るイオマンテの一部始終です。一部始終と言っても3日間を27分の映像で紹介するわけですから、マンローの意図が前面に出ていることは言うまでもありません。各カット毎の時間は入れません。

映像「イオマンテ」は、次のタイトルではじまります。字幕は、黒地に白抜き文字です。

The KAMUI IOMANDE or DIVIN DISPATCH
commonly called The AININU BEAR FESTIVAL
as observed by DR. GORDON MUNRO

第1部 用語の解説

- 1 アイヌとその起源 (The Ainu)
- 2 アイヌの宗教 (Most Ainu still believe)
- 3 オンカミ (Ongami means worship)
- 4 イナウ (Inau are wands cut from living trees)
- 5 シュツウ・イナウ (Shutu Inau are bodies ancestral spirits)
- 6 ハシュ・イナウ (Hashu means strub)
- 7 チェホロカップ (The other Inau netoba)
- 8 チセ・コロ・イナウ (Chisei-koro-Inau, a household Inau of some spirit influence)
- 9 チセ・コロ・カムイ (Chisei-koro-Kamui or house holding Kamui)
- 10 ツシヨクニ (Tushok-ni is a pole firmly fixed in the ground)
- 11 シリクラ・イナウ (Shirikura Inau are shaped like Shutu-ancestral inau)
- 12a イクバスイ (Ikubashui have been called mustache-lifters)
- 12b イクバスイ (続) (Ikubashui are made specially for the bear festival)

- 13 ヘベレアイ (Hebere-ai are specially decorated and practically harmless arrows)
- 14 ヌサ (Nusa are groups of inau)
- 15 ヌサの図式 (Diagram of Nusa)⁸
- 16 カムイ (Kamui are spirits innumerable)

第2部 ここからはイオマンテの実際⁹

第1日目 準備

- 17 祭儀の準備 (Preparing for the Festival)
- 18 神々への祭儀の準備 (The Preliminary Service to Benevolent Deities)
- 19 カムイノミ (At this family shrine the Kamui nomi-divine service)
- 20 ドラマの舞台ができる (Stage set for The Drama)
- 21 エカシ (Ekashi-elders-set up the proper array of Inau in groups)
- 22 モミの木と笹 (Notice the evergreen of fir and bamboo grass)
- 23 和製容器 (Vessels of Japanese lacquer with food and drink)
- 24 女性たちの団子作り (Women prepare skewers for files of smaller cakes)
- 25 神酒を容器に入れる (With soup boiling)
以上が準備の日で第1日目です。

第2日目 イオマンテ当日

- 26 客たちが来る (Sight-seers gather from near and far)
- 27 熊の檻 (The bear cage)
- 28 エンジュの木のカムイ (Chikube-ni Kamui)
- 29 熊は2歳 (Though two years old)
- 30 一人のアイヌが祈りを献げる (An Ainu offers prayer)
- 31 熊の首に縄をつける (Noosed from above)

- 32 熊を檻の外に出す (Rearing, but more astonished than ferocious)
- 33 神 (熊) を待つ (Awaiting the god)
- 34 娯楽 (The Shinot-“Amusement”)
- 35 エンジュの木のカムイ (Chikube-ni Kamui is also in attendance)
- 36 花矢を射る (Affer a round or two, specially decorated arrows)
- 37 熊を杭にしぼる (Then the bear is tied to tushok-ni)
- 38 神の死 (The Dying God)
- 39 祭司の祈り (An ekashi prays for the welfare of the parting spirit)
- 40 神は死んだ (The god is dead!)
- 41 熊の絞殺は儀式 (Ritual imitation of strangling)
- 42 樹木のカムイの魂のヌサ (The Ramu Nusa of Shiramba Kamui)
- 43 熊の皮をはぎ解体する (Then skinning and dividing the body)
- 44 熊のまねごと (Mimicry of the Shinot)
- 45 まねごとの背景 (Behind this frivolity the student of ancient religions)
- 46 熊の血の付いたイナウ (Chupusu Inau-emblem of regeneration)
- 47 宴 (The maratto-Feast) (注) このカットはマンローが描いた宴会場の図面
- 48 宴のパノラマ (Panorama of the feast)
- 49 東の窓 (Near the sacred East window)
- 50 向い合せに並ぶ (The double row of men face to face)
- 51 神聖な肉の分配 (Distributing the “sacred flesh”)
- 52 来客たちが肉を受け取る (Ordinary guests receive small pieces)
- 53 ご馳走を食べる (Feasting)
- 54 長老たちが踊る (Elders do a turn step-dancing)
- 55 男たちタップカラを踊る (The usual form of male dancing is called tapkara)
- 56 女たちも踊りに参加 (Women more lively in “light fantastic”)
- 57 朝まで歌い、踊る (Dancing, singing)
- 58 アイヌが熊の血を飲むこと (Some good folk condemn the Ainu for

drinking the blood of the bear)

- 59 血という文字 (The Chinese character for blood 血)
- 60 血と肉についての民俗学の言及 (Ancient history and folk-lore refer)
- 61 魂のヌサに感謝 (Thanksgiving At The Ram Nusa)
- 62 空になった血の杯 (Here are placed the empty cups of Blood)
- 63 酒の飲み方 (Here it may be noted that etiquette forbids one)
- 64 シヌラツパ (The Shinurappa-Ancestral Offering)
- 65 細く切ったアワ団子をなげる (Throwing confetti)
- 66 綱引き (Tug of war)
- 67 ものまね踊り (Mimetic Dancing)
- 68 おおいに踊る (On with the dance!)
- 69 踊り (Two chiefs view the dancing)
- 70 リムセを踊る (Dances by women are called rimse)
- 71 剣で悪霊を追いはらう (The ceremonial sword is used also against evil spirits)

第3日目

- 72 夜明け (Dawn)
- 73 ケオマンデ (The Keomande Final Departure)
- 74 献げ物と祈り (Offerings and prayers)
- 75 感謝と献酒 (捧酒) (Thanks and libations)
- 76 熊の頭を木の上におく (The Head is fixed to a forked pole)
- 77 最後の舞台 (At this last stage)
- 78 旅立つ霊を喜ばせる踊り (Ritual dance to delight the parting spirit)
- 79 長老たちの踊り (This tapkara of the elders)
- 80 希望の響きを聞く (Does not the spirit within the Ainu breast hear)
- 81 心からの踊り (This dance is no gesture of finality)
- 82 雪が降る (Felicitous snow falls)

83 アイヌは言います (So say Ainu)

雪が静かに降るなかで行われる長老たちのカムイノミで映像「イオマンテ」は終る。

3 マンローの熊送り (イオマンテ) 理解

3.1 資料

マンローの熊送り (イオマンテ) 理解には、2で紹介した映像 The KAMUI IOMANDE or DIVINE DISPATCHE commonly called The AINU BEAR FESTIVAL (字幕入り) が最も重要な資料です。しかし、映像 The Ainu Bear Ceremony (音声入り) と講演 THE AINU FESTIVAL もマンローのイオマンテ理解の手がかりになります。この3資料に基きマンローのイオマンテ理解をまとめてみました。なおマンローが映像や講演で触れているアイヌの信仰や儀式については、B. Z. セリグマン編『アイヌの信仰とその儀式』(NEIL GORDON MUNRO AINU CREED AND CULT. 1962. London) (日本語訳 小松哲郎2002年 国書刊行会 以下マンロー (2002) と略) が参考になります。

文中、資料は、都合上次のように省略し、引用または参照しました。

- 1 The KAMUI IOMANDE (映像1・(3) なお () の数字は映像を筆者が2で整理したカット番号)
- 2 The Ainu Bear Ceremony (映像2)
- 3 THE AINU BEAR FESTIVAL (講演)

マンローは、熊送りをアイヌ民族にとって最も重要な儀式として理解し、映像にして残しました。映像そのものだけでは不十分と思い、字幕や音声で補いました。特に字幕入り映像にはその意図が顕著です。27分の映像に対し約26分の字幕による解説を提供しています。映像2でもその姿勢は同じで、

簡潔ですが、映像と共にコメントが入ります。

映像は1・2共にアイヌ民族とは誰かから始ります。この点は、講演でも同じです。むしろ講演の方法論が映像1・2に引き継がれています。アイヌ民族にとって重要なキーワードの解説に講演では約半分を費やしています。KAMUI, LAMAT, INAUなどがその代表です。この点は、AINU CREED AND CULT (マンロー (2002))でも同じです¹⁰。たとえば, Kamui (カムイ), Lamat (ラマツ), Inau (イナウ)ですが、なかなか日本語には置きかえることができません。Kamuiは、英語でgodと訳されていますが、キリスト教で言う神とは全く異なる存在です。

次に3点の資料の関係について少々触れておきます。

マンローが、はじめてイオマンテ (熊送り) について講演したのが、1916年です。その講演記録がさきの「講演」です。講演は、マンローが1915年9月、北海道釧路に研究調査に行った際の調査研究のまとめから生れたものです。約100年前のイオマンテの記録になります。マンローのイオマンテ研究のスタートとなる貴重な記録で、JAPAN ADVERTISER 1916. 4. 30 Sundayに掲載されました (P. 5～6)。日本で出されていた英字新聞ですが、そこにマンローは次のように紹介されています。「原初的な儀式についての生き生きとした記述。アイヌの精神世界についての見聞。記事は、水曜日 (1916年4月26日)、日本アジア協会で発表 (read) された「アイヌの熊送り」の全文です」。当時マンローは、「熊送り」についての専門家の1人と同紙で紹介されています。

映像1と映像2の制作過程は、内田順子たちの研究が明らかにしたように、映像1がマンロー自身の手によって作られ、後に英国で音声入りの映像2が作られました¹¹。従って映像自身は、共に1930年12月25日～27日まで二風谷で撮影されたことは、両者を比較検討すると明らかです。ただ映像2にあって映像1に無いものは、最初 (冒頭) の村の全景、女たちの作業です。また映像2の音声は、映像1の解説を簡略したものと理解できます。

以上の資料の性格をふまえた上で、マンローのイオマンテ理解を、「映像1」を中心にすえ「映像2」と「講演」を参照しながら整理してみました。

3.2 人類史(民俗学)の中から

マンローは、イオマンテを単にアイヌ民族特有の「祭り」としてではなく、人類史の中に位置づけ理解に努めています。

一例をあげれば、イオマンテに似た祭りはアニミズムに通底し、ヨーロッパをはじめ他の地域にもあると言います(映像1・(2))。イングランドのメイポールとアイヌが熊を杭にくくり付ける点も共通します(映像1・(10))。また火の神(Huchi)に言及する中で、これはギリシア神話の火の女神のヘスチア(Hestia)やローマ神話のベスタ(Veſta)にも通じると言います(映像1・(16))。アイヌの自然観については、その詩を引用し詩人ワーズ・ワースとの共通点にも着目します(映像1・(16))¹²。熊の死(神の死)を論じる際は、ジェイムス・フレイザーの『金枝篇』を引き合いに出し、死と甦り(再生)の説話は、古代からまた世界に広くあるとも言います(映像1・(33))。この視点は既に講演の中でもイオマンテに似た物語は、ヘロドトスにもあるとマンローは紹介します(講演)。マンローはまた、ヨーロッパや古代にその類似性を探すだけでなく、神の死と甦り(再生)については、西アジアにもその例を見えます(映像1・(40))。アイヌは魂の不滅を信じていて、イオマンテも神(熊)の甦り(再生)を念頭に執り行っていました(映像1・(46))。

3.3 イオマンテと女たち・子どもたち

マンローは、イオマンテにおける女性たちにも注目しています。それは準備段階での団子づくり、酒づくりの映像(映像1・(17))に見ることができます。その女性たちは、単にイオマンテを主催する家の女性たちだけでなく、近所の女性たちが協力し団子や酒づくりをします。またイオマンテの主役は確かに男性たちですが(祭司・長老)、踊りでは女性たちが主役で男性たちが参加する型で進められます(映像1・(17), (56), (67), (68))。唯一女性たちがイオマンテの儀式に参加できるのは、第3日目の熊の魂が旅立つときの献酒(捧酒)のときです(映像1・(46))。また家のカムイ(chise-koro-kamui)と火のKamuiは女神です。

イオマンテでは、子どもたちにも参加する場が与えられています。一つは祭壇へ団子を運ぶ役目(映像1・(24)), いま一つは余興の綱引き(映像1・(66))です。ここでの経験はイオマンテの継承につながります。

3.4 共同性

男性たちの働きの一つに準備段階での祭壇作りがあります(映像1・(20)(21)(22)(24))。女性たちには、祭壇のためのゴザ織りの仕事があります(映像1・(24))。これらは、映像で紹介されていますが、マンローは紹介していませんがイオマンテで重要な役割をはたす熊を縛る縄、熊を縛り付ける杭、花矢、射殺のための弓と矢(映像1・(20)(32)(35)(37)(38))などは、一週間以上も前から男性たちが山に入り、材料をさがし、丹念に作ります。この作業は、イオマンテを主催する家の男性だけでなく、近所の男性たちとの共同作業です。共同性があるのはじめてイオマンテは成立するのです。この共同性は、北海道旧土人保護法制定(1899年)により奪われていきます。

3.5 バチラーとマンロー

バチラーは、イオマンテを残酷と評し、マンローが映像で記録し残すことを批判し、両者に対立が生れたとされています。

先にバチラーのイオマンテ批判は紹介しましたが¹³、ここで再度、その批判点を整理してみます。

- 1 熊の絞殺は残酷で品位がなく正当化できない。
- 2 熊の血を塗ることについて。
- 3 「私は熊祭りを聞いただけで寒くなるような気持ちになり、禁じられるようになってよかった」
- 4 「この熊祭りの習慣も後10年、15年も経つとやがてすっかり無くなるのではなかろうか」

このバチラーのイオマンテ批判(非難)を念頭にマンローの映像を見ると、次のカットは明らかにバチラーを意識して構成されたと思えてきます。

3.5.1 絞殺

その一つが熊の絞殺に関するカット(映像1・(41))です。杭に縛りつけられ熊は、カムイノミの後、弓の射手によって心臓に向けて矢が放たれます(映像1・(37))。この矢によって熊は、ほぼ即死です。その後、二本の棒で熊の首の辺りを絞めます。正確に言えば、熊の首を二本の棒で挟み、その上に数人の男たちがのりまします(映像1・(41))。しかし、この行為は儀式で熊は既に死亡しています。その意味で「絞殺は残酷」評はあたりません。バチラーは、矢による射殺を見落していたのです(映像1(37))。

3.5.2 血について

マンローは、熊の血または熊の血を飲むことについてかなり突っ込んだ見解を展開しています。

*

「ある善良な人たちは、アイヌが熊の血を飲むことに批判的ですが、生焼けの牛肉を食べ生カキをまるごと飲み込むことは、何んとも思いません。かれらは、餌でおびきよせ首を絞めた鶏を貪るように食べることに何ら気にとめていません。最高の文化人たちは、血と肝臓でできた腸詰めをおいしくするために食しています。ヨーロッパの病人は、いまでも効果のある治療法として動物の血を飲み生の肝臓を食べています。虚弱な人、貧血ぎみの人には、人間の血が輸血されています。アイヌは信仰に基き、熊の血をカムイの薬(Kamui Kusuri)、つまり神聖な薬として飲みます。薬への信仰は、薬の効力がないときでさえ治ることがあります(私訳)」(映像1・(58))

続いてアイヌの長老たちが祭壇(ヌサ)の前で血を飲む映像が写し出されます(映像1・(59)(62))。

*

「古代史や民間伝承は、この儀式について次のように言及しています。多分、神の肉と血が、少なくなったのでパンとブドウ酒が、紀元前、(long before the Christian era) これにとって代りました。ある高尚な宗教は、この動機（注）原文では the motive の下にアンダーラインを引き強調しています）を純化し理想化しました。しかし、この純真な遺風（習慣）には、議論の余地もなければ卑しめるものもありません。「比較」は、無知で偏見を持つ人にとっては憎むべきものですが、『真理は自由をえさせる¹⁴』と言う人にとっては歓迎すべきものです（私訳）。」（映像1・(60)）

血については、映像とともにその見解を述べていますが、熊の解体については「伝統的な厳格なしきたりに従ってなされる」としただけで映像はありません（映像1・(43)）。

人類学者にして医師マンローのアイヌへの率直な思いが吐露されています。これは同時にバチラー批判とも受けとることができます。

熊送りが10年、15年さきには無くなるとのバチラーの見解は、残念ながら現実となりました。しかし、これも北海道旧土人保護法にはじまる明治政府の先住民族政策が深く関係していることを忘れてはなりません。決してアイヌの努力が足りなかったのが問題ではありません。

3.6.1 B. Z. セリグマンとマンロー

マンローの著作 AINU CREED AND CULT は、B. Z. セリグマン (B. Z. Seligman) がマンローの死 (1942年) 後1962年編集、出版したものです。B. Z. セリグマンはその序文にこう記しています。

「熊送りはアイヌの人びとのあらゆる儀式の中で最もよく知られた儀式であります。マンローはこの儀式を何度も目撃したにもかかわらず、彼の著書の中ではこれに関する記述はみられません」（マンロー (2002) P. 3）と断った上で「映像1」を手がかりに、B. Z. セリグマン自身が、映画の説明をしています。その説明が巻末にあります。テーマは、イオマンテではなく The Bear Ceremony です。

今回、「映像1」の字幕とB. Z. セリグマンの映画の説明を比較検討し次の点に気づきました。

- (1) 確かにB. Z. セリグマンは、「映像1」に依拠して説明を書いたことは両者の説明文から明らかです。

B. Z. セリグマンの熊の解体の説明文 Then skinning and dividing the body proceed according to strict rules of traditional ritual. (英文版 p. 171)
マンローの字幕 (既に紹介済)

Then skinning and dividing the body proceed according to strict rules of traditional ritual (映像1・(43))

- (2) B. Z. セリグマンは、マンローの「映像1」と言うよりイオマンテそのものを十分に紹介していません。それは、次の比較から明らかです。筆者が分類した「映像1」のカット番号に従えば次のようになります。

B. Z. セリグマンの説明は、「映像1・(70)」で終わっています。第3日目がありません。

マンロー自身の「映像1」はカット(83)が最終です。

あえて英文で比較すると次のようになります。

B. Z. セリグマンの最後の一文

The feast includes mittet beer and soon the Elders and guest begin to feel its effect. Then men dance, and after a while the women join in.

N. G. マンローの最後の一文

Felicitous snow falls veiling the footsteps of the god on the way to join the spirit ancestors in their mountain home. So say the Ainu.

セリグマンの説明ではアイヌは酒に酔ってイオマンテを終えたことになりませんが、マンローは、きわめて詩的にその記録映像をしめくくっています。

3.6.2 マンローの「講演」

マンロー著作(1962)の編者B. Z. セリグマンは、先に述べたように次のよ

うに書いています。

「マンローはこの儀式（イオマンテ）を何度も目撃したにもかかわらず彼の著書の中ではこれに関する記述はみられません」。

そしてこう続けます。

「アイヌの宗教に関する書物の中で、最も重要である儀式についての説明を欠くことは重大な手落ちになると思われたので、マンローが自分のフィルムの画面（註映像1）に書いた字幕説明をもとに本書巻末の追録Ⅱに、私の追加説明を加えておきました」（マンロー（2002）小松訳 P. 3）

B. Z. セリグマンの追加説明が不十分で誤解を招くおそれがあることは、先に指摘した通りです。加えて、マンロー著作の編者の責任として、マンローのイオマンテ理解を深めるためにも「講演」（THE AINU BEAR FESTIVAL）を追録として載せる責任があったのではないのでしょうか。この「講演」は、「映像1」より約15年前のものですが、B. Z. セリグマンの追加説明より、イオマンテをより正確に伝えているからです。

4 むすび イオマンテとマンロー

マンローの映像イオマンテを繰り返し視聴し、気付いた点を整理し、まとめに代えます。

マンローの映像自体は、わずか27分ですがその背景にあるマンローのアイヌへの思いを改めて考えさせられました。次の3点をあげることができます。

1 動機 2 映像を撮ることを可能にしたもの 3 その映像を整理・編集してスコットランドへ送ったこと

4.1 動機

1930年代、日本に映画技術があったことは、大沢商会が最新の機材と技術をもってマンローに協力したことが証明します。しかし、イオマンテを映像に残す発想は日本人には生まれませんでした。それは、アイヌとその生活（イ

オマンテ)に対する日本人社会の姿勢と無関係ではありません。映像を可能にしたのは英国王立科学振興協会会員 C. G. セリグマンの理解と資金援助です。それがあってはじめて映像イオマンテは誕生しました。イングランド人パチラーは、映像に残すこと自体反対していました。

4.2 映像を可能にしたもの

いくら技術と資金があっても、それだけで撮影はできません。映像の背後に二風谷のアイヌ・コタンの人々のマンローへの信頼と協力があった点を見落してはなりません。少なくともイオマンテの準備には、2～3ヶ月、いや半年以上が必要です。子熊の飼育からすれば2年は必要です。マンローが撮影したイオマンテの子熊は、旭川で飼育されたものですから、2年ではありませんが、半年は最低必要でしょう。長い期間のマンローとアイヌとの交流があつてはじめてイオマンテの撮影は可能でした。

イオマンテに必要なイナウ、ヌサ、酒、熊の首を縛る縄作り、撮影の場となった家屋の用意だけで少なくとも1ヶ月以上かかります。このイオマンテ前の準備がいかにか大変かは、1957年に撮影された「グループ現代」¹⁵のイオマンテを視聴して思いました。たとえば、熊を繋ぐ杭にする木を探すのにコタンの人々が、森の中を歩きまわります。花矢、捧酒に使われるイクパスイは、一本一本丁寧に作られます。しかも、イクパスイは、一度イオマンテで使われると二度と使われません(映像 I 12a・b)。

27分の映像を可能にしたのは、マンローの熱いアイヌへの思いと、それに対するアイヌのマンローへの信頼ではないでしょうか。

4.3 映像をスコットランドへ送る

この映像には、英国人(スコットランド人)をはじめ外国人が先住民アイヌに対する誤解を生まないための努力の跡がみてとれます。それは、イオマンテを人類史の中に位置づけている点です。つまり興味本位の映像ではありません。先にも指摘したように27分の映像に対し、26分の解説を字幕で入

れたことからもうかがえます。またあえて、誤解を生むような場面(熊の解体)等は避けています。その背後には、バチラーが意識されていると推察しました¹⁶。

筆者が、バチラーを調べていくうちにイオマンテをめぐるマンローとバチラーの対立を知りました。「その原因は何か」を知りたいが、この研究ノートの出発点でした。

今回の映像分析、バチラーのイオマンテ理解との比較で一つの結論に達したと言えます。

バチラーが、きわめて現象的にまた感情的にイオマンテをとらえたのに対し、マンローはいまで言う学際的(人類学、歴史学、考古学、医学)な立場からアニミズムとしてのイオマンテを位置づける努力をしました。それはバチラーに代表されるヨーロッパ・キリスト教文化に対する批判とも読めます。

特に血をめぐるマンローの見解は、パンとブドウ酒によるキリスト教の聖餐式を高尚な宗教儀式とすることへの痛烈な批判と読むことができます。ちなみにマンローは、死後の葬儀をアイヌ式(アイヌプリ)を希望していました。結果は本人の意志を無視し、キリスト教式でされてしまいました。

マンローとバチラーの対立は、バチラーのイオマンテに対する誤解、偏見が生み出したものと言えます。また、それぞれの見解の根底には、イングランド出身のバチラー、スコットランド出身のマンローの立場も働いていることも否定できません¹⁷。スコットランドは、イングランドの支配下にあり、被差別の立場にありました。言語をはじめ文化を奪われた状況にあるアイヌをマンローは、バチラー以上に理解できたと言えます。それが、アイヌ文化への尊敬であり、その象徴とも言うべきイオマンテの映像化とスコットランドへ送った結果になります。

残念なことにマンローが日本に残した生フィルムは、スコットランドのように完全に保存されていませんでした。マンローが、イオマンテの映像を故郷スコットランドへ送ったことは、日本のアイヌ差別の当時の状況を考えるとき、正解です¹⁸。

4.4 イオマンテの独自性

最後にイオマンテの独自性を日本の研究者の立場から証明した研究を紹介して終わります。

食文化「肉と米」をテーマに膨大な資料に基づき学際的な研究を続けてきた人に原田信男¹⁹がいます。沖縄をはじめ朝鮮、東南アジアの動物の供犠を研究した結果、イオマンテについて次のように述べています。少々長くなりますが重要な視点なので引用します。

「アイヌ民族のイヨマンテは、たしかにクマの生命を奪うが、それまで長い時間をかけて大切に育て、しかも乳を与えて面倒をみる役割の女性までいる。あくまでクマの霊を丁寧に天の世界に送り帰すところに、この祭儀の意義がある。

これは縄文的祭礼の延長線上に位置するもので、農耕的な動物供犠とは位相を異にする。イヨマンテには、狩猟民特有の霊送りという観念が強く、神への供物という範疇には入らない。もちろんアイヌの人々も農耕を行っていたが、主要な生産ではありえなかった。彼らは農耕という目的のために動物を殺すのではなく、生きる糧となってくれる動物への鎮魂として、その霊を丁寧にクマの世界に送り帰すにすぎない」（原田信男（2014）P. 131）。

マンローの映像1と2そして講演記録は、原田が言うイオマンテの独自世界を見事に後世に残したと言えますよう。

（2014年10月28日）

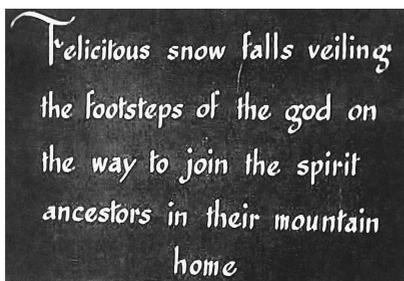
今回も出村文理さんには、資料（特に映像関係）のことで大変お世話になりました。記して感謝の意とします。ありがとうございました。

註

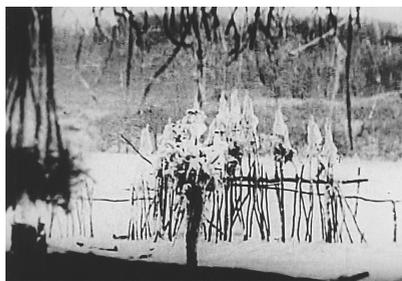
- 1) この映像は、白黒、無声、英語字幕付き、全5巻52分35秒がオリジナル版で、

管理は、National Film and TV Archives, British Film Institute です。筆者が視聴したのは、5巻ものがDVD化されたものです。1930年撮影。

- 2) この映像は、The Ainu Bear Ceremony で Royal Anthropological Institute (RAI) によって編集され現在は、教育用として VHS (黒白) 版もあり活用されています。英語音声入り。27分
- 3) THE AINU BEAR FESTIVAL は、1916年4月30日号の JAPAN ADVERTISER に発表されたマンローの講演記録。紹介文中に read とある点からも講演原稿があり、それを読みあげたものと推察できます。講演記録は、その原稿で、マンローのイオマンテに関する論文とも言えます。原文に当たったが、100年前の新聞記事なのでコピーも大変判読しにくい部分が多々ありました。
- 4) 国立歴史民俗博物館研究報告第168集2011年11月の特集マンローコレクション 研究一写真・映画・文書中心に一内田順子編
- 5) 一例として解説の写真 映像1・(82)
- 6) それに続く映像の写真 映像1・(82)
- 7) 例をあげれば、解説(第一部)では、アイヌと宗教(映像1・(2))。6カットの説明文があります。あるいは捧酒に使用するイクバスイ(映像1・(12))では解説とイクバスイの写真が交互に紹介され、計5カット。カムイ(映像1・(16))の11カット。イオマンテ(第2部)では、熊の血を飲むことについて(映像1・(56))は、映像とは別に字幕に6カットも費やしています。
- 8) 写真や映像とは別に、マンロー自身が手書きで、紹介しているものもあります。たとえばヌサの図です。MUSU KUTA NUSA of NUSA KORO KAMUI といって6枚のヌサの絵(映像1・(15))や宴の座の見取図(映像1・(47))などがあります。



註5 映像の最終場面



註6

- 9) マンローのイオマンテの紹介には、研究者例えば煎本孝『アイヌの熊祭り』(2010年・雄山閣)とはちがいで、生活感があります。それは、映像、つまりアイヌの顔や動作がみえるからでしょうか。
- 10) マンローは、『アイヌの信仰とその儀式』(2002年小松訳)で、次のように言っています。「アイヌの宗教の特徴を表す3つのアイヌ語があります。それは、ラマツ(精神・霊魂)、カムイ(神々、精霊)、イナウ(カムイに奉納する儀式上の祭具)という言葉です」(P. 15)。この書の第一章、本書の基本的概説 第二章カムイ 第三章 イナウについて述べられていますが、映像1の第1部を詳しく展開した論文です。第四章 さまざまな〈カムイ〉の像では、シュトゥ・イナウに触れています。マンローは、シュトゥ・イナウを「翼の付いたイナウ」として特別視している点も紹介しています(P. 79~84)。これは、映像1・(5)に対応します。映像ではさらっと流していますが、シュトゥ・イナウはなかなか重要なイナウであることを第四章で説明しています(映像1・(5))。
- 11) 内田順子の研究については、『桃山学院大学キリスト教論集』第49号(P. 239)参照。詳しくは、国立民俗歴史博物館研究報告第168集(2011年)参照。
- 12) ワーズワースの詩は、マンロー(2002)P. 16でも引用されています。
- 13) 『桃山学院大学キリスト教論集』第49号(P. 236)参照。
- 14) ヨハネ福音書8章32節 マンローが福音書を引用して、キリスト教批判(バチラー批判?)は皮肉です。
- 15) 「グループ現代」制作、国立民族学博物館再編集のイオマンテを、2014年10月2日、国立民族学博物館(吹田市)で視聴。撮影・編集「グループ現代」、撮影年月日 1957年3月3日~5日、平取町二風谷。103分の作品を国立民族学博物館が8分割し、再編集。全体のテーマは、アイヌの熊送り。1 祭場と祭具づくり 2 イナウづくり 3 酒・団子、こげ菓子づくり 4 弓矢づくり 5 客迎えから熊を射るまで 6 熊の解体と熊の神を家に迎える 7 熊の神の化粧 8 熊の神を神の国へ送る
- 「グループ現代」の映像「アイヌの熊送り」は、実際に行われた熊送りと言うより、アイヌ文化を記録として残すために行われた熊送りです。祭司は、萱野茂さん。当時31歳。貝澤正さんの顔もみえます。貝澤さん45歳。この映像を見て、熊送りがどんな準備のもとに実施されるかがよく理解できました。
- 1と2は、男たちの共同作業。3は、主として女たちの共同作業。酒も団子も熊や熊の神に捧げられるために作る。花ゴザの作業過程も紹介される。4

この場面は圧巻です。熊を神の国（カムイ・モシリ）へ送るために射る矢と弓をどのように作るかが詳細に記録されています。材料はすべて森から集められたものです。60本の花矢を作る過程からも熊送りに対するアイヌの人々の心が読みとれます。1から4までが準備です。5から8は、熊送り3日間が凝縮されています。この映像で重要なことは、萱野さんが、アイヌ語でカムイノミをする点です。6と7は、熊の解体です。どんなに丁寧に解体され、また熊の頭の化粧の様子を見るときアイヌが自然と共存する原点を見せられる思いです。8は、熊を神の国（カムイ・モシリ）に旅立たせる儀式です。この映像を見ることによって、筆者は、マンローの映像1・イオマンテをより深く理解できました。改めて萱野さんの存在の大きさを知りました。アイヌ民族との共生をめざすための貴重な記録です。現在は、16ミリフィルムをVHS（テープ化）で残していますが、教材として活用されるためにはDVD化が必要です。

- 16) マンローには次のようなカムイ論をめぐるパチラー批判があります。これはその一例です。「パチラー氏は、アイヌはその信仰の中で〈パセ カムイ〉を〈唯一の真の大神〉としているという説を唱えています。これはどうやら、パチラー氏はアイヌの信仰と彼が信じている一神教であるキリスト教とを、大まじめで、似たもの同士として扱おうとしていたのではないかと思います。またアイヌの人々の中には、パチラーに迎合すべく彼の宗教の教えに賛同して神は一つであると述べた者がいたことも考えられます」（マンロー「2002」P. 21）。この種のパチラー批判はPP. 19～21に散見できます。
- 17) スコットランド出身のマンローだからこそ、アイヌ差別を理解したと二風谷のアイヌ貝澤耕一さんは、語っています（小野邦夫制作DVD「マンロー慰霊祭」2012年6月12日）。貝澤耕一さんは、マンローはケルト人（スコットランド）差別とアイヌ差別に共通点をみたのではないかと話しています。スコットランド人マンローについては、国立歴史民俗博物館の記録映画「Ainu Past and Present—マンローのフィルムから見えてくるもの」の中でもスコットランド人マンローについて触れています（内田順子）。イングランド出身のパチラーが持ち合せないアイヌへの視座です。
- 18) 貝澤正さんは、マンローの資料を地元の人が大切にできなかったこと、また管理をまかされた鷹部教授（北海道大学）がマンロー館と資料を8000円で売り払ったと書き残しています（貝澤正『アイヌわが人生』1993年 岩波書店 PP. 150～153）。多分売り払った中にイオマンテのフィルムも含まれていたと想像でき

ます。これが、日本社会のアイヌに対する当時の状況です。それに対しマンローがスコットランドに送ったイオマンテのフィルムをはじめ、イオマンテの祭具等は、国立スコットランド博物館をはじめ大英博物館に大切に保存されてきました（参照『海を渡ったアイヌの工芸—英国人医師マンローのコレクションから』2002年4月26日 北海道ウタリ協会刊 P. 23, 30～51, 56～57, 60～86）。

- 19) 原田信男の「米と肉」の研究は、『歴史のなかの米と肉—食物と天皇・差別』（1993年4月 平凡社）にはじまり、『なぜ生命は捧げられるのか—日本の動物供犠』（2012年6月 御茶の水書房）、『捧げられる生命—沖縄の動物供犠』（共著2012年10月 御茶の水書房）、そして本文で引用した動物供犠研究の集大成とも言うべき『神と肉—日本の動物供犠』（2014年4月 平凡社）で完結します。原田の20年以上に及ぶ動物供犠研究の結果、イオマンテは日本や東アジアの各地で見られる動物供犠とは異質の儀式であるとの結論に達したのです。